Faculty Development
INVITATION
山梨大学教育人間科学部
第31号
March.30.2014

2013年度 教育人間科学部ＦＤフォーラム報告

今、大学は授業のあり方を見直さなければならなくなっています。そのような中で、2014年1月22日（水）15：00～16：30、Ｙ号館２階会議室において「学生と教員で作り上げる授業：大学教育のレベルアップのために」というテーマで、教育人間科学部FDフォーラムがもたれました。FDフォーラム始まって以来の多くの学部生、院生、教職員の方々にご参加いただけたことにまずもって感謝いたします。

ディスカッション内容は、学生の授業参加意欲と教員のやる気の相互作用、専門教育と共通教育の関係等々と多岐にわたりましたが、特記しておかなければならない項目は：

1. 授業全体ならびに授業各回の「目的」を教員ならびに学生が共有しておかなければならない。今日の授業のこの活動はなんのためにやっているのかわからない、ということが時々起っているようです。
2. 教育人間科学部の学生は、「授業に対する勉強時間が（他学部より）少ない」のに、「授業終了時の達成感は（他学部より）高い」（授業評価データより）というのは、学生が授業内容を理解し、達成感を得たというよりも、たくさんの授業をとりながら、いくつものレポートをとりあえず（コピー＆ペーストし）こなしたという達成感である、ということが判明。どうすれば授業内容理解までレベルアップすることができるか検討が必要です。
3. 教員がやる気のない授業はだんだん学生もやる気がなくなってくるし、学生のやる気のある姿で教員もやる気がさらに出てくるという相互作用が見られる。単に、教員が悪い、学生が悪いと言うのではなく、授業は教員と学生が作り上げていっているのだという感覚が双方に必要です。

学部生が「興味がない」、「無駄だ」と言う共通科目の授業も一度社会に出た経験のある大学院生の方からは、「社会に出て、そのような授業の知識が役立った」といった経験談が出てきたりして、学習者同志のやり取りの有効性も垣間見られたフォーラムでした。

FD委員会　岡林　春雄

附属学校園における新任教員の初任者研修

新任教員の初任者研修が附属学校園で行われました。2013年度は５名の先生が参加され、それぞれ大変有意義な研修となったとお聞きしております。参加された先生方の報告を紹介させていただきます。

社会文化教育講座　宇多賢治郎

初任者研修として、６月６日に附属小学校で社会科教育を見学させていただきました。私自身は経済学部出身のためこのような研修の経験がなく、教育現場を知る機会と期待しておりましたが、予想したよりも多くのことを学ばせていただきました。

今回は、専門の経済学に関係する内容が多くなる中学校ではなく、直接扱われることが少ない小学校をあえて選択しました。それは社会科教育の初期に、経済に関する事柄がどのように教えられているかを知り、自身の大学の講義や指導だけでなく、研究を考えるためにも役立てたいと考えたためです。

研修では、２時限目から４時限目まで三学年の社会科の授業を参観しました。２時限目の６年生は鎌倉時代の元寇（日本史）、３時限目の４年生は119番

（消防と救急など公共サービス）で、写真や地図を電子黒板に投射したものの説得力とそれを使った説明の効果を、改めて実感しました。また、４時限目の３年生は逆に電子機器を全く使わずに、町（附属小学校近辺）のことを児童の皆さんと一緒に考えるという内容で、対話・参加型の講義の良さを見せていただきました。

中でも印象的だったのは、国語がご専門である先生が授業のまとめの際、「算数や理科と違って、社会は見方によって意見が分かれるもの」と説明していたことでした。この「意見が分かれる」ことが小学校の社会科教育の初期段階からあるものとご指摘いただいたことで、これまではっきりとは自覚していなかった社会科学の難しさを再認識できました。

また、児童の皆さんと給食をご一緒するという機会を設けていただきました。私の給食の思い出はアルミ皿、先割れスプーン、パン、三角パックの牛乳のため、今回の箸を使い、メニューは麦ご飯、シシャモに野菜の煮物、ひじきサラダと食育効果が高く、体に良さそうな和食であることに驚きました。こういう健康的なメニューを常食にするとよいのですが、なかなか難しい状況にいる身としては、こちらの重要性も再認識すると共に、大変うらやましく思いました。

私はこれまでも、日本経済をどう研究していくかだけでなく、どうやって経済学者以外の方に説明するかを模索していたため、今回の研修は自身にとって刺激になり、また見直す大変良い機会となりました。このような貴重な体験の機会を設けてくださったFD委員会の先生方、また附属小学校の先生方、授業を参観させてくれた４年３組と６年２組の皆さん、授業だけでなく楽しい昼食の一時を共にした３年３組の皆さん、中でも大盛りにしてくれた給食当番の皆さんに御礼申し上げます。

社会文化教育講座　神山　久美

６月27日に赤レンガ館で行われた、附属中学校「技術・家庭」家庭分野の２年生の授業「ふれあい体験」を参観させて頂きました。この授業は、NPO法人「Happy Space ゆうゆうゆう」に委託し、「パパ・ママ体験講座」として実施されたものでした。

家庭科では、「家族・家庭と子どもの成長」の内容があり、幼児と触れ合うなどの体験的な学習活動を通して、幼児に関心をもたせるとともに、自分の成長や家族などについて関心・理解を深めることをねらいとしています。授業当日は、生後２ヶ月の赤ちゃんから幼児までの13組の親子が、ボランティアで笛吹市から訪れました。

生徒の約６割が、今まで全く赤ちゃんと触れ合ったことがないと挙手しました。助産師さんの妊娠・出産の講話やマタニティ・ジャケットの着用体験、さらに、保育士さんの子どもとの触れ合い方やおもちゃに関する話や新生児人形の抱っこ体験をした後で、グループに分かれて赤ちゃんとの触れ合い体験が始まりました。最初は子どもを前にしてとまどっていた生徒たちでしたが、保育士さんやお母さんたちの声かけによって、少しずつ子どもとの関わりが始まります。生徒は自分の声や動作に、子どもが反応することに一喜一憂し、子どもの表情や動きをじっと見つめます。子どもと触れ合っていくうちに、生徒たちの表情が穏やかになっていきました。

最後に、一人の母親が出産までの苦労や子どもの誕生の喜びについて話をし、生徒がお礼の言葉を伝えて終了となりました。授業後の生徒たちは、年長者としての自覚や自信を持ち、少したくましくなったようにも感じられました。

私は中学・高校で教えておりましたが、短時間で生徒の変化を明確に感じ取れる授業は、ほとんどありませんでした。しかしこの授業では、生徒の表情・行動の変容が読み取れ、このような貴重な授業を参観することができ、大変うれしく思いました。また参加した母親の立場からも、学校でこのような活動に参加をすることは、子育てをしていく上で意義があると思いました。地域でこのような活動が行われていることに、大変感銘を受けました。

今回の研修でお世話になりました方々に、心より御礼申し上げます。

社会文化教育講座　松本　聡子

初任者研修の一環として、2013年5月30日に附属幼稚園に伺わせていただきました。当日は、幼稚園内にある水田に苗を植える活動をされており、その様子を見学させていただくことができました。子どもたちは一人一人苗を手に持ち、とても活き活きとした表情で苗を植えていました。（後日、収穫したお米を使ってカレーパーティーをなさったと伺い、子どもたちの嬉しそうな顔が目に浮かびました。）また、田植えの後の、植えた苗を描くという活動の時間も見学させていただきました。子どもたちは非常に詳しく、細かい根を一本一本、とても丁寧に描いていて、子どもたちの観察する力・表現する力に大変驚かされました。

子どもたちのさまざまな活動の中で、年上の子どもたちは、自分たちより小さい子どもたちにとても心配りをしており、年上であることを自覚し、それをとても誇らしく思っており、また、年下の子どもたちはお兄さん・お姉さんをとても頼りにしているシーンが何度も見受けられました。年齢の異なる子どもたちと一緒に活動したり、コミュニケーションをとったりすることで、自分自身の成長を子どもたちなりに日々感じているような印象を受けました。

附属幼稚園での一日は、私にとって、子どもたちのパワーと可能性を体で感じることができる一日でした。今回の研修を受け、子どもたちや子どもをとりまく環境への理解を深めていくうえで、実際に体験することがいかに重要かを改めて実感いたしました。

このような非常に貴重な体験をする機会を与えてくださった附属幼稚園の先生方とFD委員会の先生方に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

科学文化教育講座　山際　　基

平成25年6月13日に初任者研修の一環として附属幼稚園にお邪魔致しました。現在1歳半の子供を持つ身として近い年齢の子供達の様子を見てみたかったこと、また情報技術を専攻する身として、幼年期における情報機器の利用状況、情報技術に対する見方や考え方を直接園児から聞いてみたいという思いから幼稚園での研修を希望しました。小中学校にはパソコンを利用する授業がありますが、近年、幼稚園児にタブレット端末を配布して幼稚園教育に利用する事例があることを知り、今まで知る機会がなかった幼年期の子供の様子を知りたいという希望がありました。

朝、登園する園児を迎えつつ、年少、年中、年長の各クラスの部屋を見学させていただきました。園庭の遊具でのびのび遊ぶ子供、屋内で創意工夫をこらして自らの遊具を作り遊ぶ子供、子供達が自由に豊かな発想をもって過ごす姿を見ておりました。子供達が作った遊具の中に情報機器を模したものが存在したことを確認しました。紙で作った電話、ブロックで組み立てられた携帯電話、そしてそれを大人やテレビ番組の出演者が操作する姿を真似て遊ぶ園児も見受けられました。園児に話を聞いてみると「電話」「ケータイ」「スマホ」という言葉が園児達の口から出てきており、また利用回数の大小の差はありましたが使用経験のある子供が多い印象を受けました。また、園児達の生活の中には既にこれらのデバイスが取り込まれそうな状況にあることを認識致しました。

幼年期における情報機器の利用については幼稚園の先生も関心があるようで、園児が帰った後に副園長の武川先生といろいろとお話をさせていただきました。園児からは聞くことがなかったことについてもお話をいただけました。

園児から話を聞く時には、園児と共に様々な遊びをしておりましたが、幼稚園の先生方のご配慮のおかげで積極的にかつ多くの園児と関わることができました。貴重な体験をする機会をくださいました園長の藤本先生はじめ幼稚園の先生方に御礼申し上げます。また、FD委員会の先生方に初任者研修の機会をいただき感謝申し上げます。

社会文化教育講座　後藤賢次郎

新任研修の一環で、附属中学校の授業を一日見学させていただきました。

さて、本研修の報告として、大きく２つの点から述べさせていただきます。

子どもたちについて：1、２校時は中学１年生（地理）、3、４校時は２年生（地理）、5、６校時は３年生（公民）と、全学年の様子を見ることができました。子どもたちは、学年に関係なくよく手が挙がり、発言し、意欲的でした。特に３、４校時の授業は、社会事象そのものだけでなく、それらを捉える地形、気候、土地利用、歴史・文化などの「視点」を意識させようとした授業でした。子どもたちは具体的な社会事象を括る言葉（概念）を探したり、降水量が「多い」「少ない」などの基準を、比較を通してつかもうとしたりしていました。

先生方について：地理では、子どもが自身との関連を見出しにくい、遠く離れた土地の湾、河川、湖、山脈、平野…などの項目的な教授がなされがちです。しかし、1、２校時の地理では、アメリカ大陸の自然を学ぶ際に、子どもたちに自身のアメリカに対するイメージを答えさせた上で、先生が自身のアメリカでの生活経験を語っていました。これにより、子どもにとって経験の外の世界がぐっと近づいてきます。また既習の他の国、地域との自然環境との類似点などを尋ね、授業で獲得した知識の転用、応用を促していました。５、６校時の公民では、抽象的な言葉に具体的な事例を補ったり、子どもに銀行の仕事を「図」「絵」にさせることによって、銀行が利益を得る仕組みを構造的に理解させていました。

これらの指導は、子どもに社会を捉えさせる上で重要ですが、簡単にできるものでもありません。こうした指導ができる資質は、実践を積めば自然と獲得されるのでしょうか。あるいは、大学で学んだことがベースになっているのでしょうか。

本研修を通して附属学校の教育に対する理解が深まったことに加え、自身の研究や学生指導にも示唆を得る機会となりました。お忙しい中お世話になりました先生方に心よりお礼申し上げます。

「第19回ＦＤフォーラム」参加報告

FD委員会　副委員長　岩永　正史

2014年２月22・23の両日、京都にある龍谷大学深草キャンパスで開催された「第19回FDフォーラム」に参加した。統一テーマ「社会を生き抜く力を育てるために」に沿って、一日目は二つのシンポジウム、二日目は13の分科会に分かれて研究・実践報告が行われた。

一日目はシンポジウムⅡ「未来を切り開く学生を育てるには」、二日目は第７分科会「授業アンケートと教育の個性化」に参加したが、想像していた内容との違いに、正直言って、私は、かなり違和感を覚えた。FDとは、広い意味では教授団の能力開発、教員開発であり、近年一般には、「授業内容の改善」「教える技術や方法の向上」（狭義のFD）の意味で使われる。だが、シンポジウムでは、入学者の定員割れや中途退学をどう防ぐかという文脈で大学教育の改善やその情報公開のあり方が語られ、分科会ではFDは、PDCAサイクルの「二巡目」に入っているとして、FDの取り組みで明らかになった弊害が語られた。

とはいえ、学ぶものがなかったわけではない。印象に残ったことがらを、山梨大学教育人間科学部に当てはめて考えるとどうなるのか、以下に略記しよう。

●入学者の定員割れを防ぐには、どんな学力層の入学者が、大学でどう育ったかを公開することが必要だ。
→山梨大学教育人間科学部にあてはめれば、入学生の教職指向との関係で教育の効果や教員就職率を考えねばならない。平均値を公表してもさしたる意味はない。

●私立大学では、建学の精神が授業アンケートに反映され、それとの対応で学生の成長を見ようとしている。
→山梨大学教育人間科学部にあてはめれば、学生の、教育、広くは、人の学びや育ちに対する認識がどう獲得され、深まったかを見る必要があろう。学部に見合う授業アンケートの作成あるいは利用が必要になる。

●FDの義務化によって、授業方法が工夫されるようになったが、「やらされているアクティブ・ラーニング」「学習動機の低い者がレベルを引き下げている少人数授業」の実態があるのを見落としてはならない。
→山梨大学教育人間科学部にあてはめれば、もともと少人数授業が中心なのだから、方法論に惑わされずに、その少人数授業の質を見極めることが重要になる。